

## (準備研究)

# 現代の社会福祉の解明のための社会福祉理論史の構築

野 口 友紀子\*

Yukiko NOGUCHI

## 研究実績の概要

### 【具体的内容】

現代の社会福祉理論の源流となる戦後から60年代までに登場した社会福祉理論の検討を行った。他領域では、総力戦やロックインなどの新たなアプローチによる歴史分析がなされているが、社会福祉の歴史では、地方史や個人史が隆盛を極め、理論史の領域はほとんど顧みられていない状態が続いている。

戦後から60年代までの時期に、現代の社会福祉理論の潮流が作り出されたといわれており、この時期を検討することで現代の社会福祉理論の源流を再解釈することができる。従来の研究は戦前と戦後の断絶を強調しているが、本研究によって戦前、戦中から戦後に至る社会事業・社会福祉理論の連続的な側面を描き出すことができる。これは現代の社会福祉理論史までに至る研究の一部である。

社会福祉理論の戦前からの潮流については以前から研究を進めていたが、その一部が以下の成果となった。

タイトル:「社会事業はどのように体系化されてきたか—「学」と「ケースワーク」の戦前・戦中・戦後—」社団法人日本社会福祉学会編『対論 社会福祉学 1 社会福祉原理・歴史』(中央法規出版、平成24年10月、196-219)

内容: 社会福祉の戦前・戦中・戦後について1920年代後半から1950年代前半までの「社会事業」の「学」の構築論とケースワーク論を検討した。「学」の議論は時期ごとに内容を変化させ、戦後の「学」の議論

が戦前の議論を反復していくが、ケースワーク論はどの時期にも科学性の名の下に展開された。「学」の議論とケースワーク論は戦前は別々に議論されていたが、やがて「学」の議論はケースワーク論を無視できなくなる。それはケースワーク論には「学」の内側からの体系化を図る可能性があったからである。

上記の論稿の成果の一部をふまえて、今年度は以下の学会報告を行った。

タイトル:「社会事業をめぐる議論の収斂過程—1946-52年の『社会事業』から—」(日本社会福祉学会第60回秋季大会(於: 関西学院大学)、平成24年10月)  
報告内容: 1946年から1952年までの『社会事業』誌にみる社会事業をめぐる議論の傾向を明らかにし、戦前・戦後の議論の潮流を検討し、今回新たに付け加えられる視点として、(1) 専門職養成の必要、(2) 社会保障制度との関係から捉える視点、(3) 地域組織化の特質や必要性の議論がみられることを明らかにした。

### 【意義】

#### 1 学術的な特色

個別史が主流になりつつある社会福祉の歴史の領域で、「社会福祉理論」に焦点をあてたことで社会福祉とは何かという本質的な問いに対する歴史的分析を部分的に行うことができた。

#### 2 独創的な点と予想される結果と意義

この研究の独創的な点は、「ゆるやかな集団モデル」による、「ロックイン」と「総力戦体制」のアプローチ

\*社会福祉学部教授

チを援用した社会福祉理論史を描くことである。第一に、「ゆるやかな集団モデル」として社会福祉の歴史を描く際に「集団」を扱っていることと、その集団が固定的なメンバーで構成されていないことが従来の研究にはないものであり、対象の設定がオリジナルである。また、分析枠組みとして「ロックイン」と「総力戦体制」のアプローチによって、社会福祉理論の多様性を描き出すことと、多様な理論の関係性と変遷を描き出すことは、従来の研究にある孝橋理論や岡村理論のような、個人の理論のみの分析を描くものとは異なっており、理論のダイナミズムを描く点でオリジナルである。

結果として、どの時代においても常に複数の理論が乱立し、統一的な見方は存在していないが、その中においても継承されている部分も見受けられた。そのため個別の個人の理論ではなく、社会福祉理論史の一部が再構築できた。

本研究の意義は、同時期における複数の理論の関

係性を分析することもでき、時系列的にみる縦のつながりだけでなく、同時期の横のつながりや断絶をみることもできる。このような視点の広がり、今後の社会福祉の歴史研究をさらに進めることを可能とする。

## 研究発表

### 雑誌論文

1. 野口友紀子「社会福祉事業本質論争の諸相—社会福祉理論史上の再評価として—」社会事業史学会『社会事業史研究』、査読の有無・有、第43号、2013年3月、pp. 69-85
2. 野口友紀子「社会福祉史を再考する意義—社会福祉本質論争と大河内の社会事業論との関係—」東京社会福祉史研究会『東京社会福祉史研究』、査読の有無・有 第7号、pp. 55 - 70